

〔論 説〕

オリンピックにみる産業的・文化的要素
—19世紀オリンピック復興過程における一考察—*

大 賀 紀代子

はじめに

1896年、第1回夏季オリンピックアテネ大会が開催された。オリンピックという国際的なスポーツイベントの開催を提唱したのは、フランス人貴族のクーベルタン男爵 (Pierre de Coubertin) であった。彼は、イギリスのパブリック・スクールで行われていたスポーツ教育に強い感銘をうけ、その教育を本国フランスに導入することを企てたのである⁽¹⁾。

彼が「オリンピック」というグローバルなスポーツの祭典の開催という夢へと導かれていた頃、ヨーロッパではギリシア独立が叫ばれていた⁽²⁾。このような風潮のなか、彼は古代ギリシアの「オリンピア競技会」から「近代オリンピック」の発想を得ていたのであった。

このヨーロッパにおけるギリシア独立への高い関心は、古代ギリシアのオリンピックの遺跡の発掘に対する高い関心と関係していたと考えられている。

1732年、フランス人のベルナール・ド・モンフォーコンによって、古代オリンピックが行われた位置が確認された。その後イギリス人の考古学者であったリチャード・チャンドラーによりその後広くヨーロッパに知れ渡るようになったと考えられている。

このような遺跡の発掘は、ルネサンス以降から続くヨーロッパの知識人たちのギリシアへのあこがれをより一層加熱させた。ヨーロッパで沸き立つギリシアへの興味は、「親ギリシア主義」とよばれ、ギリシア精神への熱狂という意味合いをもった⁽³⁾。クーベルタン男爵も他のヨーロッパの知識人たちと同じようにギリシア精神への関心が高く、その思いは彼に現在まで約120年間も続く国際スポーツイベントとしての近代オリンピックの開催という大仕事を成し遂げさせたのである。

考古学的な興味に強く影響されたオリンピック復興には、学術的・文化的な要素・視点が十分に盛り込まれてると考えられる。実際、オリンピックは文化的要素をもつものであると「オリンピック憲章」に明記されており、スポーツ競技だけでなくその文化的な側面も、近代オリンピックを構成する欠かせないものとなっている⁽⁴⁾。

* 本稿は千葉商科大学経済研究所研究プロジェクト「オリンピック復興運動に関する社会文化史的考察」における研究成果の一部である。

(1) 村田奈々子「近代オリンピックの始まり—普遍的理念とナショナリズムのせめぎ合い」橋場弦・村田奈々子編『学問としてのオリンピック』第5章 山川出版社、2016、198-204。

(2) 真田久『19世紀のオリンピア競技祭』明和出版、2011、35-37；ヴォルフガング・ベーリンガー（高木葉子訳）『スポーツの文化史—古代オリンピックから21世紀まで』法政大学出版局、2019、344-345。

(3) ベーリンガー『スポーツの文化史』2019、342-344。

(4) 国際オリンピック委員会『オリンピック憲章（2019年6月26日から有効）』日本オリンピック委員会、2019、10、68。

そこで、本稿では、オリンピックがもつスポーツ競技以外の点に着目しなら、オリンピック復興がさかんにおこなわれた19世紀をみていきたい。

1. 近代オリンピックにおける文化的要素の変遷

現在、オリンピックにおいて文化的な要素の重要性は高まっている。来る2020年夏季オリンピック東京大会では、オリンピックのもつ文化的な意味合いは、近代オリンピックの約120年の歴史のなかで最も強くなっている考えられている。

クーベルタン男爵によってもたらされた「文化的・教育的な側面をもつスポーツの祭典」であるオリンピックは、時代によってその文化的な意義の捉え方は異なっていた。太下義之著『オリンピック文化プログラム』に大きく依拠し、以下その変遷を追っていきたい⁽⁵⁾。

1986年に近代オリンピックが誕生して以来、このオリンピックが持つ文化的な意義の捉え方はその時期に応じて主に5つに分類されると考えられている。①「万国博覧会」と関わりの深い時代②「芸術競技」がオリンピック競技の一つとなっていた時代③オリンピックの公式なプログラムとして「芸術展示」が行われた時代④多彩な行事を「文化プログラム」として開催した時代⑤オリンピックおよびその開催国に対する「文化プログラム」の重要性がより大きくなった時代、の5つである。

①の「万国博覧会」との関わりが深い時代とは、「オリンピックというものが同じ年に同じ都市で開催された博覧会の『添え物』として扱われていた時期」を意味する。1896年に開催された第1回夏季オリンピックアテネ大会から1908年に開催された第4回夏季オリンピックロンドン大会までの4回のオリンピックは、オリンピックの文化的要素が少ない時期であった。

その理由として、当時の大規模な国際的イベントであった万国博覧会に併せて開催されるスポーツイベントとしてオリンピックが存在したことがあげられる。この点についてはクーベルタン男爵も「オリンピックの開催式や授賞式等のセレモニーは19世紀のパリ万国博覧会から強い影響を受けた」ことを明示している⁽⁶⁾。現在において、開催年をずらし開催都市も異なる場合が多い万国博覧会は、約110年以上前の世の中ではオリンピックと同時開催されていたのであった。

当時、万国博覧会は、各国が自国の経済力・技術力・伝統・文化をさまざまな形で表現し、展示し、それを競い合う場であった⁽⁷⁾。つまり、オリンピックは各国がスポーツで競い合うための場であり、一方、文化・芸術・産業・技術などにおいては、万国博覧会で競い合うという、それぞれが競争のフィールドを異にすることで、互いに意味のある国際的なイベントとして存在していたのである。

(5) 太下義之「オリンピック文化プログラム序論—東京五輪の文化プログラムは二〇一六年夏に始まる」東京文化資源会議編『TOKYO1/4と考えるオリンピック文化プログラム—2016から未来へ』、勉誠出版、2016、2-14.; B. Garcia, *The Olympic Games and Cultural Policy*, New York: Routledge, 2012, 34-40.などを参照されたい。

(6) 関口英里「東京オリンピックと日本万国博覧会」(養老慶喜編)『東京オリンピックの社会経済史』日本経済評論社、2009、1。

(7) 重富公生『産業のパクス・ブリタニカ—1851年ロンドン万国博覧会の世界—』勁草書房、2011、138-150。

1896年から1908年という世紀転換期において、経済力をいかにアピールするかは、ヨーロッパ諸国をはじめとする国々の関心事であった。そのため、経済・技術面を競い合う意味合いはなくスポーツの実力に焦点を当て競い合うオリンピックは、各国にとって万国博覧会ほどの重要性は感じられなかったのではないかと推測される。当時の国際的なビッグイベントは万国博覧会でありそれに付随するイベントとしてオリンピックが認識されていたことは、当時の社会経済史的な観点から理解できよう。

その後1912年に開催された第5回夏季オリンピックストックホルム大会では、この万国博覧会の付随的な存在として認識されていたオリンピックの意味するところに変化が生じ始める。クーベルタン男爵は当初、建築・彫刻・絵画・文学・音楽の5部門をオリンピック競技の一つとして設けようとし、この5部門は「芸術競技」という形で実施された。この5部門において、参加者であるアーティストによるスポーツを題材にした芸術作品が造られ、それらに点数がつけられた。そして順位が決められ、スポーツと同様、1位・2位といったものを競い合ったのである。

しかし、そこにはスポーツ競技のようなタイム・距離・得点などの数値化されうる明確な基準が存在していたわけではなかった。審査する人々の主観が大きく作用し、公平性に欠けていたのである。そのため、第二次世界大戦後の1948年に開催された第14回夏季オリンピックストックホルム大会を最後に、この「芸術競技」は廃止されることとなった。

1952年の第15回夏季オリンピックヘルシンキ大会では、「芸術競技」に代わり「芸術展示」というものが、オリンピックの公式プログラムとして誕生した。この「芸術展示」は第24回ソウル大会が開催された1988年まで続いた。

1964年開催の夏季オリンピック東京大会でも、「芸術展示」が公式プログラムとして行われていた。この大会では「美術部門」と「芸術部門」の2部門があり、計10種目の芸術作品が展示された。「美術部門」では古美術などが展示され、「芸術部門」では歌舞伎がパフォーミング・アーツ部門の作品として披露されたのである。

そして、第25回夏季オリンピックバルセロナ大会からは、多彩な行事が「文化プログラム」として行われるようになった。この「文化プログラム」は、オリンピック終了後もその開催国に対し大きな影響を持つこととなった。バルセロナ大会の場合、グローバル化が加速するなかで多文化理解の観点から「文化」の重要性が高まったという背景の下、バルセロナという都市のブランド形成にオリンピックの「文化プログラム」が多大な影響力を持つこととなったと理解されている。軍事独裁政権から民主化された時期に開催されたバルセロナ・オリンピックは、この大会の前に開催された第24回夏季オリンピックソウル大会の終了後からその後約5年間、オリンピックのプラスの影響をバルセロナは受け続けていたと考えられている。

また、2004年に開催された第28回夏季オリンピックアテネ大会では、開催の準備期間である2001年から文化プログラムである「カルチュラル・オリンピアード」が始まった。このプログラムでは、音楽・演劇・ダンス・パフォーマンス・オペラコンサートなどの舞台芸術をはじめ、映画や文学などに関するイベントが行われた。この「カルチュラル・オリンピアード」の企画や運営を目的として、2000年にはアーツカウンシルである「ギリシア文化機構（Hellenic Culture Organization）」が創られた。この「ギリシア文化機構」は、オリンピック終了後もギリシアの現代文化・芸術の国際的な振興を目的とした団体と

して活動を継続した。

2012年に開催されたロンドン大会では、この「文化プログラム」がオリンピックおよび開会国にとってより大きな重要性を持つようになった。2020年の東京大会では「文化プログラム」に対する2012年のロンドン大会から始まった新たな捉え方を継承しつつ、日本独自の価値観を東京大会独自の要素を交えた新しい「文化プログラム」の誕生が期待されている。

以上、「オリンピックのなかの文化・芸術」についてその変遷を確認した。万国博覧会が持つ文化・芸術・技術といったものの捉え方を取り込んだとまでは言えないが、しかし、古代オリンピックがスポーツ競技をメインとするなかで、クーベルタン男爵の意思を受け継ぎ、文化・芸術的要素が近代オリンピックの一部として加えられていったことは明確であろう。そして近代オリンピックは開催されるごとに、文化・芸術が開催国に与える影響は大きくなり、いまでは欠かせないものとなっている。

このように、オリンピックにおけるスポーツ競技以外の分野は年々その存在感を拡大させ、今では独自の「文化プログラム」として確立するに至っている。

では、このオリンピックにおけるスポーツ競技以外の要素が、近代オリンピック誕生前のオリンピック復興過程期において、どのような形で存在したのであろうか。その手掛かりを探るべく、次章ではその様子をみていきたい。

2. 19世紀ギリシアの「オリンピア競技会」と「産業博覧会」

前章でのべたように、そもそも夏季オリンピックにおける「文化プログラム」は、20世紀初頭において重要視されてはいなかった。その結果、オリンピックと同じ時期・同じ開催地で実施されていた「産業博覧会」がその文化的役割を担っていた。

オリンピックと産業博覧会との関係は、主に19世紀におきたギリシアでの「オリンピア競技会」においても確認される。

クーベルタン男爵により「近代オリンピック」が1896年に開催されるより以前に、ギリシアでは「オリンピア競技会」が存在していた。この「オリンピア競技会」とは、1839年代半ばにおいて、作家であるパナヨティス・スツォス（Panagiotis Soutsos）をはじめとする知識人たちにより、「古代オリンピア競技祭」の復興が提唱されたことと深く関係している⁽⁸⁾。

彼らのいう「古代オリンピック」とは、紀元前776年に第1回大会が開催され、その後393年に開催された第293回まで約1200年にわたりギリシア北西部のオリンピアの地でおこなわれたゼウスの祭典のことである。

「古代オリンピック」は、4年に一度、夏に開催されており、全ギリシア世界が参加する国際的な性質をもつ祭典であった。当時、ギリシアには都市国家であるポリスが1,000以上に存在していた。この1,000以上のポリスが存在するという状況は、当時のギリシアが多数の小国にわかれそれらが分立した状態にあり、そのため常に戦いが起きていたことを示している。しかし、このポリス同士の対立が繰り返されるギリシアにおいて、ゼウス

(8) 真田『19世紀のオリンピア競技祭』2011, 49.

の祭典であるオリンピックが開催されている間は、互いに戦いをやめ、各国の代表者がオリンピアに集まり身体的なスポーツ競技で競い合っていたのである。

この古代オリンピックでは、貴族が中心となりスポーツ競技がおこなわれた。オリンピアというどの国にも領有されていない共有で中立の神域において、各ポリスが対等の立場で富や肉体の美を競い合いそれに勝利することは、当時の貴族にとってその地位を確保することにつながった。そのため、全ギリシア世界の政治エリートたちが挙ってオリンピアに集まったのである⁽⁹⁾。

スツォスはこのゼウスの祭典であるオリンピックを19世紀に復興させることを望んだ。彼は古代ギリシアの文化の中にギリシア人としての民族的なアイデンティティを求めた。彼がギリシア人としてのアイデンティティをオリンピックに求めたその背景には、当時のギリシアにおける政治的・社会的な問題があったと思われる。それは、オスマン帝国から独立し、「ギリシア王国」を建国することであった。ギリシアは、1821年から1829年までの9年間、オスマン帝国と独立をかけて戦った。そして、1830年、ようやく独立が承認され、1832年にオソン1世を初代王とするギリシア王国が誕生した⁽¹⁰⁾。

スツォスは1835年に古代オリンピック競技祭の復興を政府に提案した。その案には、ギリシアの独立戦争の開始された3月25日を国の祝日とし、その日にオリンピック競技会を開催するというものが盛り込まれていた。しかし、彼の要求は当時の内務大臣であったKolettis Ioannisにより、オリンピック競技会には「産業製品展示会」も合わせて開催するという内容を加えたものに修正されることとなる。この修正された案を政府は受け入れた⁽¹¹⁾。

Kolettisは、この競技会を、アテネ・イドラ・トリポリ・ミソロンギにおける「ギリシア公式競技会」と命名する⁽¹²⁾。この競技会では、古代オリンピックでおこなわれていたスポーツ競技に加えて文芸・芸術などの文化的な色合いの強い分野でも競技もおこなわれるよう計画された。競技会は特定の都市で継続的に開催されるのではなく、ギリシア独立戦争に関わった多くの都市の間での持ち回り制とされ、競技場や走路の建設等を政府が援助することが決められた。そして、6,000人の観客を収容できる大きな劇場を各開催地に建設することなども定められた⁽¹³⁾。

さらに「産業製品展示会」については、ギリシア国内だけでなく、海外に住むギリシア人も自らの商品を展示できるようにと考えられた。古代オリンピックにおいて全ギリシア世界から参加者が集まったように、この「ギリシア公式競技会」においても、国内だけでなく海外に住むギリシア人の参加をも促したのである。そして彼らは、自らの商品を展示するという形で競技会に参加した。そのため、海外に住むギリシア人からの製品輸入がスムーズにいくよう、輸入製品の関税の引き下げをおこなうなどの策が政府に提案されたの

(9) 橋場弦「古代オリンピックーギリシア人の祝祭と身体」橋場弦・村田奈々子編『学問としてのオリンピック』第5章 山川出版社、2016、1-7。

(10) ベーリングガー『スポーツの文化史』2019、344-347。などを参照されたい。

(11) 真田『19世紀のオリンピア競技祭』2011、50。

(12) K. Georgiadis, *Olympic Revival: the revival of the Olympic Games in modern times*, Athens: Ekdotike Athenon S.A, 2003, 24-25. : 真田『19世紀のオリンピア競技祭』2011、51。

(13) 真田『19世紀のオリンピア競技祭』2011、51。

であった。

Kolettis は、この「ギリシア公式競技会」における賞金について、運動競技よりも文芸・芸術などの文化的な要素の強い分野の賞金を重視していた。例えば「哲学書に対しては 10,000 ドラクマ」・「古典文献学の最優秀作品に 8,000 ドラクマ」などであり、一方「戦車競走に 4,000 ドラクマ」・「競馬に 3,000 ドラクマ」・「競争に 2,000 ドラクマ」というように、文化的なものとはスポーツ競技との間にその額に差があった。この哲学書に対する 10,000 ドラクマとは、当時のギリシアにおける労働者層の賃金が月 20 から 30 ドラクマであったことを考えるとかなり高額であったと考えられている。

そして、この「ギリシア公式競技会」では古代オリンピックの精神を受け継ぐように、宗教的な儀式も盛り込まれ、大会プログラムの第 1 日目に「宗教的な式典」が設定される予定であった。一方、最終日には「悲劇と喜劇の上演、音楽と舞踊」が予定された⁽¹⁴⁾。

このように、ギリシアでは 19 世紀の自国の独立を機に、「古代オリンピア競技祭の復興」が計画されたのである。古代オリンピックの精神というギリシアのアイデンティティを受け継ぎながらも、そこに工業化という 19 世紀ヨーロッパの社会経済の今を「産業博覧会」という形でこの競技会に取り入れた。ギリシアが他のヨーロッパ諸国と同様に、自国の産業の発展と工業の進展に対し国を挙げて進めていこうとしたのである。

この国の方針は、その後「国家産業振興委員会」の設置へとつながっていった。「ギリシア公式競技会」にみられる古代オリンピア競技祭の復興は、1837 年に「国家産業振興委員会設立に関する王室条例」という形で正式に承認された。このことは、政府が全ギリシア世界を対象とした古代オリンピックをモデルにした競技会の実施を正式に発表したことを意味する。この発表では「わが国の農業と工業の振興をはかり、各地域の特産品を多様に育成することにより、ギリシアの国家的富を増加させることを願うものである」と競技会の目的を明確にした。つまり、競技会は単にスポーツを行うといったものではなく、ギリシアの経済的な繁栄のために行うものであることを明言したのである⁽¹⁵⁾。

古代オリンピア競技祭において、祭典の中心はゼウスに捧げる宗教儀式であった。そのため全ギリシア世界からゼウスに捧げるためのさまざまな奉納品が集まった。そして、その奉納品は当時の主たる産業であった農業をはじめとし、当時のギリシア人の社会経済に欠かせない産業・モノと深く結びついていたといえる。古代オリンピックが持つ、その当時の社会経済とつながりがあるものを神ゼウスに奉納する習慣は、近代における「ギリシア公式競技会」においても受け継がれた。それが「ギリシア公式競技会」における産業製品の位置づけであろう。つまり、古代のギリシア世界において主産業であった農業などがもつ役割は、19 世紀半ばにおいては農業だけでなく、「工業」というイギリスの産業革命によって誕生した新しい産業にもその役割が担わされたのであった。すなわち、工業製品は、古代オリンピックに置き換えた場合、神ゼウスへの奉納品がもつ役割に近いと考えられよう。そのため、一見スポーツ競技と直接関係なく感じられる「産業製品展示会」は、古代オリンピア競技祭の復興というテーマにおいて重要な役割を担っていたのではないかと推測される。そして、「産業製品展示会」を「ギリシア公式競技会」の一部とし、その

(14) 真田『19 世紀のオリンピア競技祭』2011, 53.

(15) 真田『19 世紀のオリンピア競技祭』2011, 55.

開催にあたり「国家産業振興委員会」を政府が設置し大会の目的を「ギリシアの国家的富を増加させること」と明言したことは、19世紀半ばのギリシアにとって自国における最大の関心事が「工業化」であったことを意味しているのではないだろうか。古代オリンピックがおこなわれていた当時は、小国が分裂し、ポリス間における戦いがギリシア世界を覆っていた。この戦いもオリンピックの間だけは一旦休戦となり、互いに民族的な連帯を認識する機会となった。つまり、戦いの続く古代ギリシアにおいて、このポリス同士の戦いは各国家にとってとても関心度の高いものであったと考えられる。そのため、古代よりオリンピックというものは、ギリシアにおいて国家が一番力を入れるべきことと深くつながっていると思われ、この視点が近代においてオリンピックの復興という考えのなかにおいても変わることなく受け継がれたのではないだろうか。その結果、古代から存在するオリンピックというイベントのなかに近代的要素の強い「産業・工業」が組み込まれたと考えられる。

その後、「国家産業振興委員会設立に関する王室条例」に基づきオリンピック復興の準備がより本格的に行われていった。条例の施行前の段階では「ギリシア公式競技会」という名称が用いられる予定であったが、競技会の名称は「オリンピア競技会」という名称となることが正式に決められた。名称の決定の他に競技会の運営や賞の授与などについての議論も交わされたとされている。

しかし、この「オリンピア競技会」の開催が現実のものとなるにはまだまだ多くの壁が存在した。スツォスはその後も頑なに「オリンピア競技会」の開催をアピールし続けた。彼はそのアピールとしてギリシア人の民族的な団結を一心に訴え、ギリシア王国という国家とギリシア人という民族の統合の象徴として「オリンピア競技会」を位置付けた。それは、長い年月をかけギリシア人が他地域に分散してしまったことを危惧するものであったと考えられている。1851年、彼は「オリンピア競技会」をスポーツ競技・技術競技・産業博覧会の3分野からの構成とすることを政府に再度提案したのであった。

そして、この彼がもつギリシア民族統合への熱い思いは、貿易商人であったザッパス(Zappas)によって受け継がれることとなった。ザッパスは、ルーマニアに移住後、1851年にスツォスが政府に提出した案に心打たれ、「オリンピア競技会」に資金を提供することを願い出たのである。ザッパスの資金をもとに、競技場や産業製品の展示ホールなどが次々と建設されていった。この「オリンピア競技会」実現へのプロセスには、当時のギリシア外務大臣であったRangavisの関与がみられるとされている⁽¹⁶⁾。

そして、ザッパスやRangavisは、スツォスの案をもとに、スポーツ競技と産業博覧会を併せ持った「オリンピア競技会」の誕生を、1859年に成し遂げたのであった。しかし、1859年に実現した「オリンピック競技会」には、当初、スツォスが想定した「文学や詩に関する競技」は設けられることはなかった。そして、政府はスポーツ競技よりも、産業の発展に力を入れ、産業博覧会を重要視するという見方を示したのである⁽¹⁷⁾。

この産業博覧会を重要視する政府の見解は、その後「オリンピア規約」を生み出した。この「オリンピア規約」には、産業博覧会に関する内容が定められている。それによると、ギリシア王国の各郡の農業生産物などの特産物を選別し、「オリンピア競技会」に展示す

(16) 真田『19世紀のオリンピア競技祭』2011, 71.

(17) 真田『19世紀のオリンピア競技祭』2011, 78.

ると明記されている。オリンピック競技会の委員会についても、「委員会はあらゆる細心の方策で実業家や農作物の生産者の熱意と競争心を高めるように努力する」と記されていた。この競争により選ばれた特産品の数々は、当時1867年にパリで開催される予定であった万国博覧会などに出席することが定められた⁽¹⁸⁾。つまり、「オリンピア競技会」の一部として開催される産業博覧会は、万国博覧会に出展するための品を選ぶためのオーディションであったと考えられる。すなわち、ギリシア王国の政府が、「オリンピア競技会」において産業博覧会を重要視し、世界にむけて自国の産業をアピールすることができる宣伝効果を持ち、またギリシアという国の威厳を示す場として機能しうる万国博覧会にむけて、ギリシアの産業が切磋琢磨し産業の水準を向上させることができるまたとないチャンスとして産業博覧会を認識したのである。このことは、当時の産業が世界市場を視野にいられて「ものづくり」をしていたことの表れと思われる。この点に、19世紀後半における経済のグローバル化の進展が確認されよう。

こうして、ギリシアでは、古代オリンピック競技会の復活を通じ、クーベルタン男爵が提唱した近代オリンピックが開催されるよりも前に、自国においてオリンピックというスポーツ競技会のなかに産業博覧会が組み込まれていったのである。そして、ギリシアでの「オリンピア競技会」の誕生は、イギリスで第1回が開催された万国博覧会とほとんど時期を同じくして誕生したのであった。1851年のイギリスで開催されたことを機に、その後現代に至るまで、オリンピックと同様に国際的な大イベントとして君臨し続ける万国博覧会とつながりがあることが十分に予測されよう。

3. 19世紀イギリスでみられた地域単位の「オリンピック」

前章で述べたようなギリシアでおきた古代オリンピック復興の動きは、「オリンピア競技会」の開催という形で、万国博覧会の生みの親であるイギリスにもマスコミを通じて伝えられた⁽¹⁹⁾。この「オリンピア競技会」の開催はイギリスと決して無縁ではなかった。

イギリスでは、ギリシアで「オリンピア競技会」が開催されるよりも前に「オリンピック」と名の付くスポーツ競技が存在していた。

遡ること約400年前、イングランドの中央部に位置するコッツウォルズ (Cotswolds) において「コッツウォルド・オリンピック」と呼ばれるスポーツ競技大会が行われていた。この大会は、開催期間は短く1日のみであることも多く、住民同士の宗教をめぐる争いを緩和させるためのものであったと考えられている⁽²⁰⁾。

この「コッツウォルド・オリンピック」が開催されたコッツウォルズは、グロスタシャー州にその一部が属している。グロスタシャー州は、古くから織物の生産がさかんな地域であり、技術の伝統が継承されてきたという特徴をもつ。産業革命期においては、手織工 (handloom weaver) などの労働者階級の人々に対しても、学校での教育が男女問わず行

(18) 1858年に公布された「オリンピア規約」の第12条を参照。真田『19世紀のオリンピア競技祭』2011, 84。

(19) “The Times”, 13 April 1859, 10, *The Times Digital Archive*.

(20) M. Polly, *The British Olympics: Britain's Olympic heritage 1612-2012*, Swindon: English Heritage, 2011, 22-24.

われていた⁽²¹⁾。イギリスでは16世紀より文学や演劇などにおいて‘Olympian Games’という言葉が登場しており、古くからその名が知られていたことが確認される⁽²²⁾。教育水準が高いと思われるグロスタシャー州において、古代のスポーツの祭典であるオリンピックが物語として語り継がれていても不思議ではないのではないだろうか。つまり、イギリスにおいて、「ヨーロッパの起源とされるギリシアで、ゼウスを祭るスポーツ競技が行われていた」という事実が、物語の形などで受け継がれていた可能性が高いと思われる。

そして18世紀において、古代ギリシアのオリンピックに関する研究やそれを題材にした芸術作品等が次々とつくられていったのである。また、イギリス人のなかにある古代ギリシアへの関心は、古代ギリシアの遺跡調査という形でも表れた⁽²³⁾。

19世紀にはいり、イギリスは産業革命の進展とともに社会は大きく変化していった。そのような中においても、新たにオリンピックと名の付くスポーツ競技大会が誕生していた。今でもその名を残すのが「ウェンロック・オリンピック (Wenlock Olympian Games)」である。

ウェンロック・オリンピックは、イングランドの中西部に位置するシュロップシャー州のマッチ・ウェンロック (Much Wenlock) で行われているスポーツ競技大会である。この大会は1850年から始まり、ギリシアで「第1回オリンピア競技会」が開催されるよりも前に開催された。この競技大会では古代ギリシアで行われていた競技である競歩・幅跳び・高跳び・ハンマー投げ・クリケット・輪突き・フットボール・などの試合が行われたとされている。加えて、輪投げ・袋飛び・手押し車なども行われた。第1回の大会は、2日間にわたり競技が行われた⁽²⁴⁾。

下記は1983年8月5日付け「ロンドン・タイムズ (The Times)」に掲載されたウェンロック・オリンピックに関するコラムである⁽²⁵⁾。

マッチ・ウェンロックでオリンピックが生まれた日

ポール・ハリソン

来年 (1984年) 開催予定の夏季オリンピックロサンゼルス大会は、いままでの大会以上に豪華絢爛になるであろう。しかし、シュロップシャー州の学校のグラウンドで灯されるオリンピックの炎はそれ以上に輝いている。

ウェンロック・オリンピックは、マスコミや世界のスターたちが興味・関心をもつよう

(21) 大賀紀代子「産業革命期イングランドにおける労働者世帯の教育―手織工世帯を事例とした考察―」『大阪大学経済学』第59巻第4号、27-37、2010、28-33。

(22) P. Radford, 'The Olympic Games in the Long Eighteenth Century', *Journal for Eighteenth-Century Studies*, Vol. 35 No 2, 2012.

(23) "The Times", 1 February 1876, 6, *The Times Digital Archive*. イギリス議会で論議しあうための参考資料等がおさめられた「英国議会資料 (British Parliamentary Papers)」によると、オリンピアやデルフィにおいて、イギリスによる演劇が行われていたことが確認される。Report from the Select Committee on Dramatic Literature with the Minutes of Evidence, 1832, 10. 等。

(24) C. Beale, *Born out of Wenlock : William Penny Brookes and the British origins of the modern Olympics*, Derby : The Derby Books Publishing, 2011, 26. : ベーリンガー『スポーツの文化史』2019, 351-352。

(25) "The Times", 25 August 1983, 20, *The Times Digital Archive*.

な大会ではない。むしろ父親や母親が、ピクニックをしながら競技に参加する子供の様子を見ることに、心躍らせるような大会である。今年(1983年)、ウェンロック・オリンピックには1,000人以上の参加者が集った。133年間続くこの大会は、地元のとある男性の夢により始まった。その男性とはウィリアム・ベニー・ブルックス博士である。彼は1896年にアテネで近代オリンピックが開催されるよりも前に、イングランドの人里離れた田舎町であるマッチ・ウェンロックにオリンピックを取り入れたのである。

クーベルタン男爵は、1890年、ウェンロック・オリンピックを観戦するためにマッチ・ウェンロックを訪れた際、ブルックス博士へ以下のような賛辞を述べた。「ギリシアで今行われているオリンピックは、古代オリンピックの再現というレベルには未だ達していない。ギリシア人ではなく、御年82歳になるこのブルックス博士こそ、オリンピックを組織し活気づいたものになっているのである。」

博士は、近代オリンピックが開催される数か月前にこの世を去った。彼は、クーベルタン男爵に近代オリンピックの実現という名誉のある仕事を任せ、自身は全体を大まかに監督するという役割を担った。

マッチ・ウェンロックにある *High Street* の商店の窓には、博士の功績をまつるディスプレイがひっそりと飾られている。このディスプレイは、この町を訪れた観光客を惹きつけるだけでなく、200~300人の地元の人々に対してもこの地で1850年に開催された第1回ウェンロック・オリンピックを思い出させるものである。

その後歳月を経て、*tilting at the ring* (中世において馬上槍試合のためのウォームングアップとして行われていた) のような昔から続くイギリスの伝統的な競技と、勝者に月桂樹の冠をかぶせる行為にもみられるような古代から続くオリンピック精神とが、混ざり合いついていった。

ウェンロック・オリンピックの競技は、今でも *Linden Field* にて行われている。そして現在、参加者には、ブルックス博士にちなんで名づけられた学校の設備やスポーツ会館の使用が認められている。今年障害者のテニス競技も行われた。クリケットやアーチェリー、ボーリングの試合も行われ、子供たちはテニスコートでラケットを振り回した。大人による棒高跳びの試合も行われた。

特別列車が多数の参加者や観客を乗せてミッドランズからマッチ・ウェンロックまでの道のりを走行した際、今大会において一番の盛り上がりが見られた。障害者競技は、競技人口の減少と大会を運営するウェンロック・オリンピック協会の会員数の減少により、1960年代中葉には一時期衰退した。

その後、1977年に復活し、今では幅広くおこなわれている。ウェンロック・オリンピック協会の秘書であるノーマン・ウッド (*Norman Wood*) は、今日の大会はブルックス博士の意向に近いものであるとし、「第二次世界大戦以降、協会は一年に一度、ビッグイベントを開催しているのである。そのイベントが始まると、我々はすぐさま、『競技を見ている』のではなく『競技に参加している』ように感じられる。」と述べている。

ウェンロック・オリンピック協会は年間を通じて活動している。4つの陸上連盟チーム、3つのクロスカントリー連盟チーム、室内競技チーム、5人制サッカーチーム、そして登山チームとしての活動などである。近年では障害者競技関連のイベントの告知にも力を入れている。

近代オリンピックは本来のあるべき姿を見失っているとウッド氏は考えている。「近代オリンピックからナショナリズムを排除すべきである。選手は個人として競技に参加すべきであり、国旗のために参加するのではない。」と彼は述べ、小さな笑みを浮かべた。そして「選手がオリンピックという地獄にいる猫のように感じられはしないか？」と語った。

スポーツマンシップを通じて、参加費を徴収し、基金を設立したことにより、ウェンロック・オリンピックの開催費用は、たったの約 1,500 ポンドとなっている。例えば、ウッズ氏により資金集めとして、野菜を育て販売する活動が行われている。そして、ウェンロック・オリンピックの競技は一切の政治活動とは無関係である。協会の会長であるヒッグス (E.B. Higgs) 評議員は、「政治活動とは無縁で在り続けること、これが私たちの方針である。」と述べた。

このコラムによると、ウェンロック・オリンピックはその誕生から 100 年以上 (1983 年時点) も存続し続けていることがうかがえる⁽²⁶⁾。このオリンピックはブルックス博士によって開催されたことも確認される。そして、このオリンピックはイングランドの中世の騎士の伝統を重んじたスポーツが取り入れられ、大会数を重ねるにつれて古代ギリシアの要素が加わっていったことが読み取れる。つまり、イギリスの伝統とギリシアの伝統が融合しあいオリジナルのスポーツイベントへと発展していったのである。そして、そこには近代オリンピックの特徴の一つである「ナショナリズム」は構成要素として存在しなかった。政治的な意味合いは一切なく、純粋に古代オリンピックの精神を感じながら、スポーツを競い合う場であるといえる。

この政治の介入を否定するウェンロック・オリンピックは、19 世紀、マッチ・ウェンロックという地域の特性を生かし、雇われの農業労働者も参加対象とするものとなっていた。当時、マッチ・ウェンロックは農業を主体とする町であった。この地域では、産業革命に伴い社会構造・経済構造が変化するにつれて、雇われの農業労働者の貧困が問題視されるようになってきた。当時、この地域では、Wenlock Agricultural Reading Society (WARS) という機関によって、この地域で生活をする成人のための教育機関が設立され、自然史や植物学などの科目とともにオリンピックに関する授業 (The Olympic Class) が設けられていた。この教育機関は、ウィリアム・ペニー・ブルックス (William Penny Brookes) によってウェンロック・オリンピックの開催の 9 年前には創設された。どのような内容の授業が行われていたのかについては一次資料を用いたさらなる調査が必要ではあるが、しかし、この地域ではオリンピック教育が行われていたこと自体は否定できないであろう。この地域において成人が教育をうけ、そしてその教育の内容にオリンピックが含まれていたことは、マッチ・ウェンロックという町では教育という仕組みのなかにオリンピックを盛り込み、知識としてその普及を広めていったことがうかがえる。この教育機関を設立したブルックスは、雇われの農業労働者の労働環境の改善を目指し、この教育機関の設立を提案したのであった。当時のウェンロックでは、雇われの農業労働者は労働環境の悪さから彼らが酒浸りになることが多く見られた。ブルックスはウェンロックの人々の道徳的・

(26) 現在の近代オリンピックのように、今では障害者競技もプログラムに盛り込まれていることもうかがえる。

身体的・知的な向上を目指しこのような教育機関の設立を提案したのであった。そのなかでも特に屋外でのレクリエーション活動に加え、ものづくりの腕前や体を使った運動のレベルを競わせ賞を与えるなど、雇われの農業労働者をはじめとする労働者階級の生活改善を図っていった。つまり、スポーツ教育や仕事にまつわる技能の競争を通じ、労働者階級の教育を行っていったのである。

ブルックスは、この成人を対象とした教育機関は雇われの農業労働者のためのみではなく、代々この地域で農園を持ち農業を行ってきた人々や農園領主たちのためにも有益であると考えた。つまり、体育や仕事にまつわる技能の競争を通じ労働者の生活が改善されることは、結果的に彼らと関わりのある雇用主などの階級の人々に対し、彼らが労働者階級に対して抱えていた問題の解消を促すこととなると考えたのである⁽²⁷⁾。

このようなスポーツ教育と仕事にまつわる技能の競争により地域の問題を解決する方法を導き出したブルックスは、先に述べた1859年開催の「第1回オリンピック競技会」で長距離走者の優勝者に賞を寄贈している⁽²⁸⁾。このことは、イギリスの農業地域で行われたウェンロック・オリンピックと、古代オリンピック競技の復興を感じさせるギリシアの「オリンピック競技会」との間に、何らかの関連性があることを示唆していると思われる。

そして、両者の間には、競技の参加資格において、似通ったものが存在した。先に述べたようにウェンロック・オリンピックは労働者も参加対象としていた。また、ギリシアの「オリンピック競技会」においても労働者を対象とするものとなっていた。

ギリシアの「オリンピック競技会」は、第1回・第2回において、労働者を参加対象としていた。肉屋などの商店で働くもの、石切職人、手仕事を行う労働者など、労働により対価を得る職業をしていたさまざまな人々の参加がみられたのである。そして、彼らの競技参加に際し、彼らの自宅のある場所から開催地であるアテネまでの交通費等は、オリンピック競技委員会が負担していた⁽²⁹⁾。そして、競技で賞を得た場合、金銭的な富を手に入れることが可能であったのである。

つまり、両競技大会において、競技参加者に階級的な制約が存在していなかったことがわかる。すなわち、古代オリンピック競技会の復興と何らかのつながりを持つ両大会において、階層的な衝突は存在しなかったといえる。

しかし、このような「万人のためのオリンピック」という現在のオリンピックの理念に近い精神は、その後、1870年代頃から変化していくこととなった。その変化をもたらしたのは、当時ヨーロッパのスポーツ界の中心であったイギリスの価値観であった。

イギリスは、古くからスポーツは貴族のものであるという価値観が存在していた。労働の対価として金銭を受け取ることをせず、無償での政治参加に勤しむ彼らは、ジェントルマンと呼ばれた⁽³⁰⁾。当時、彼らは、古代ギリシアへの高い関心を示し、遺跡の発掘や収集に熱を上げていた。19世紀に入り、オリンピックの遺跡をはじめデルフィなど、古代ギ

(27) Beale, *Born out of Wenlock*, 2011, 23-25.

(28) ベーリンガー『スポーツの文化史』2019, 352.

(29) 真田『19世紀のオリンピック競技祭』2011, 141. 「近代オリンピック」において、クーベルタン男爵は必要な費用はすべて参加者の負担とすることを考えていた。小川勝『オリンピックと商業主義』集英社, 2012, 18.

(30) 村岡健次・川北稔『イギリス近代史』ミネルヴァ書房, 2003, 188.

リシアの精神を感じさせる遺跡の度重なる発掘が進められていくなかで、古代オリンピック競技会への関心も高まりも見られていった⁽³¹⁾。この高まりは、ブルックスにより発案されたウェンロック・オリンピックが開催された後も、オリンピックと名の付くさまざまな競技会をイギリスで生み出すこととなった。例えばイギリスの工業化の進展に大きな役割を果たしたリヴァプールにおいても、マッチ・ウェンロックのように、オリンピックと名の付くスポーツ競技大会が開催されていた。それは、「リヴァプール・オリンピック・フェスティバル (Liverpool Olympic Festivals)」という名で、1860年代において数回開催された⁽³²⁾。

この「リヴァプール・オリンピック・フェスティバル」が開催されている頃、1865年にロンドンで「イギリス・オリンピック協会 (National Olympian Association)」が設立された。その翌年には、ウェンロック・オリンピックを提唱したブルックスらの企画により「イギリス・オリンピック (National Olympian Games)」が、1851年ロンドンで開催された万国博覧会の目玉であったクリスタル・パレスで開催された。

このような動きに対し、イギリス国内において「アマチュア運動競技協会 (Amateur Athletic Association)」が設立された。この競技協会は、古くからの価値観である「スポーツ＝ジェントルマンのみが行うもの」を強く主張する団体であった⁽³³⁾。この団体の力により、「イギリス・オリンピック」への労働者の参加が否定されかけたところを、「イギリス・オリンピック協会」が反対し、ウェンロック・オリンピックのように労働者も参加可能な競技大会にすることが決められた⁽³⁴⁾。

しかし、この「アマチュア運動競技協会」にみられるイギリスの価値観は、ギリシアの「第3回オリンピア競技会」を労働者の参加を否定するものへと変化させていった。

このようなイギリスとギリシアでみられた労働者の参加をめぐる問題は、1896年クーベルタン男爵によって近代オリンピックが開催されるにあたり、大きな問題へと発展していくことになる。

おわりに

以上のように、「オリンピック」はスポーツ競技以外の要素をもちながら存在してきた。17世紀イギリスで開催されてきたコッツウォルド・オリンピックにおいては、地域の問題を解決することを目的として開催されており、スポーツ競技のための大会という位置づけではなかったと思われる。19世紀にはいり誕生したウェンロック・オリンピックにおいては、政治とのかかわりはなく、イギリスとギリシアの伝統を受け継ぐものとして存在

(31) ジュールズ・ボイコフ (中島由華訳) 『オリンピック秘史—120年の覇権と利権』早川書房、2018、31。

(32) 周知のように、当時のイギリスは、ヴィクトリア女王の下パクス・ブリタニカを形成し世界で最も経済力をもつ国であった。当時、イギリスの貿易を支えた港のあるリヴァプールには、当時多くの労働者が存在していた。この多数の労働者がいたリヴァプールで開催された「リヴァプール・オリンピック・フェスティバル」では労働者の参加は認められていなかった。

(33) 小川勝『オリンピックと商業主義』2012、61-62.; ボイコフ『オリンピック秘史』2018、41.; P. D. Coubertin, *Olympism: Selected Writings*, N. Muller (ed.), Lausanne: International Olympic Committee, 2000, 599.

(34) ベーリンガー『スポーツの文化史』2019、353。

した。この伝統を受け継ぐという観点は、スポーツを通じてその身体能力を競いあう点に力点がおかれているというよりはむしろ、中世イングランドと古代ギリシアの文化を傳承することに焦点が置かれていると思われる。そのため、単なるスポーツ競技をおこなう地域のイベントではなく、文化伝統という形で一種の教育的な視点がうかがえよう。この視点は①ウェンロック・オリンピックの誕生がブルックス博士によって行われたこと、②彼が労働者の生活改善を目論みこの大会を開催したこと、③労働者のみならず雇用者にとっても、労働者の生活改善は結果的にプラスの効果をもたらしたこと、④彼が成人を対象とした教育機関を設立し、そこにおいてオリンピックの授業がおこなわれていたこと、これらのことと深く結びついているのである。

このウェンロック・オリンピックの開催を追いかけるかのように、古代ギリシア遺跡への興味・関心の高まりのなかで、ギリシア王国において、「古代オリンピック競技祭」に当時の国家の最大の関心事であった「産業」を要素として盛り込んだ「オリンピック競技会」が開催されていった。

その後、イギリスのジェントルマンによるスポーツ競技における労働者排除の動きのなかで、1986年、第1回近代オリンピックが幕をあげる。

近代オリンピックは、当初、スポーツ競技のみの大会であり、19世紀ギリシアでみられたような産業的な要素や、19世紀イギリスでみられたような文化的な要素はあまりみられなかった。そして、その役割を担ったのは、オリンピックと同時に開催された「万国博覧会」であった。

1851年にイギリスのハイドパークで開催された万国博覧会では、労働者も展示を鑑賞し、博覧会を大いに楽しんだことが記録として残っている⁽³⁵⁾。このことは、ジェントルマンの伝統・しきたりが根強く残るイギリスという国においても、国際的な文化的・産業的なイベントにおいて、階級を問わずそのイベントを鑑賞できる社会になっていたことがうかがえる。

展示・出展に際しては、どれほどの階級的な格差が当時存在したのかということについて、今後明らかにする必要があるかとは思われるが、しかし、近代オリンピックにおいても、開催数を重ねるごとに文化的・産業的要素が盛り込まれ、結果的には階級を問わず参加の機会が与えられる国際的なイベントに変化していったのである。このことは、文化的・産業的要素が、近代オリンピックという国際的なイベントを通じてヨーロッパ社会に与えた大きな変革であると思われる。

第1回近代オリンピックが開催された19世紀末、イギリスをはじめ多くのヨーロッパ諸国では、工業化社会の進展とともに「労働者」の政治参加の機会が増加していった。つまり、増加していく労働者が国の政治に関わり、それを伝統によって否定することが難しい社会が到来しようとしていたのである。このことは労働党の誕生をももたらした⁽³⁶⁾。

ブルックス博士が、労働者の生活の改善に尽力したように、社会にとって労働者の存在はもはや無視できないものであり、上流階級にとっても関与せざるを得ないものであった。このような風潮のなかで、博士は労働者と上流階級とを文化によって社会的に融和させようと試みたのであろう。そこに、古代オリンピア競技会のように、社会平和を願う地域の

(35) 重富『産業のパクス・ブリタニカ』2011, 5.

(36) 村岡・川北『イギリス近代史』2003, 222-223.

姿がみてとれよう。

経済史家のジョエル・モキアは、「古代ギリシアより受け継がれる知識が、年月を経て国や地域に広がり、受け継がれ、発展し、結果的に産業革命をもたらす数多くの発明を生み出すきっかけをつくった」と述べている⁽³⁷⁾。つまり、近代オリンピックが誕生した19世紀の工業化社会は、モキアの言葉を借りるならば、古代ギリシアより続く文化・伝統が時代を経て進化した結果誕生にいたったものであると解釈できる。そうであるならば、工業化社会という点においても、ヨーロッパの起源が古代ギリシアであると言わざるを得ない。

古代ギリシアより人類が受け継いだ知識が、形を変え進化し、結果的にもたらされた発明に牽引された19世紀の工業化社会において、古代ギリシアのオリンピックは、近代という時代にあうよう姿を変え、再び私たちのもとに舞い戻ってきたのである。

このオリンピックにおける文化的・産業的な要素は、工業化社会の終焉を迎えようとする今日の社会において、今後どのような役割を担っていくのか、今後の研究において追求していく大きなテーマであると思われる。

(2019.9.26 受稿, 2019.11.16 受理)

(37) J. Mokyr, *The Gifts of Athena : Historical Origins of the Knowledge Economy*, Princeton: Princeton University Press, 2002などを参照されたい。

〔抄 録〕

本稿では、「近代オリンピック」およびその復興運動期において行われたさまざまな地域的「オリンピック」についての考察を行った。

1896年にクーベルタン男爵によって提唱された「近代オリンピック」は、当初、産業的・文化的な要素はほとんど持ち合わせていなかった。同じく19世紀に誕生した産業的・文化的な国際イベントである万国博覧会と「近代オリンピック」を同時期・同都市で開催することにより、オリンピックはスポーツの国際イベントとしての地位を確立していった。

その後、20世紀中葉において、オリンピックは独自の産業的・文化的な要素を持ち始めるようになり、現在においては、オリンピックに欠かせない重要な構成要素となっている。

このオリンピックがもつ産業的・文化的な要素は、近代オリンピックの誕生以前から存在したギリシアの「オリンピア競技会」やイギリスの地域的な「オリンピック」である「ウェンロック・オリンピック」においても確認された。特に、「ウェンロック・オリンピック」においては、イングランドの伝統的な文化とギリシアの古代オリンピック文化の融合が図られていたことが見て取れた。また、この地域では労働者に対するオリンピック教育も行われ、オリンピックへの参加が労働者の生活改善に繋がるという教育的な役割をも担っていたこともうかがえた。